特集〈懐風藻〉

『懐風藻』——模倣の思考

村井　紀

1

しばらく前、安万侶の墓誌が発掘され、いわゆる『古事記』偽書（偽撰）説が再燃したおり、私は偽書説に沿って考えたことがあった。[注1] それはこの議論のうちに書物の生成にまつわるテキスト理論との同一性を見いだしていたからだが、そのとき疑念をいだかざるを得なかったのは記序に語られている国語表記上の苦心を語ったくだりであった。ごく簡単に言って、ほぼ同時期の『懐風藻』序にあっては、どう考えても言語表現上の困難という点では、まさるとも劣らないはずなのに、それらしき言説はなく、異国の文学を何のためらいもなく達成しているかのように思われ、そこに両者にわたる素朴な疑念をいだいたのである。

そして私は、記序での安万侶の言説にはある転倒された言語についてのイデオロギーというものがあり、その「文字」（漢字・漢語）に対する意識は賀茂真淵以来の国学者たちのそれとパラレルであって、かれらの思念こそは「文字の抑圧」とも呼ぶべき制度だという考えに至ったのである。ここで転倒といったのはいずれも「文字」を根拠とした思念であるにもかかわらず、かれらはあたかも国語（音声言語）を根拠としているかのように語っているからである。[注2]

いうまでもなく、記序の語る「上古の時、言・意並びに朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於きて即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に逮ばず、全く音を以ちて連ねたるは、事の趣更に長し。」というような国語表記上の困難と、たとえば日本古典文学大系『懐風藻』「解説」で小島憲之のいう、上代人がその「文学ごころ」を漢詩として表現する際、「歌に比べてまず困難な表現上の制約」を受けていたこととの、そのどちらがより困難であったかについては判定できるものではなく、私の疑念も含めて、私たちの想像の域を出るものではないだろう。少なくとも『懐風藻』序は「聖徳太子に逮びて、爵を設け官を分かち、肇めて礼義を制めたまふ。然すがに専らに釈教を崇み、未だ篇章に遑もなかりき。」とは語ってはいても、つまり詩文を作る暇もなかったとは言っても、小島氏が想定する「困難な表現上の制約」については何も語ってはいないからである。もとより小島氏の想定は『懐風藻』の詩文の内実から、つまるところ六朝詩などの模倣であるところから導き出されたものであるだろう。かれらは模倣の形でしか詩文をなし得ず、そこに小島氏は「困難な表現上の制約」を見るのである。しかし、この

想定は転倒した見方によっているのではあるまいか。模倣に「困難」を見ていることもそうだが、模倣について小島氏も私たちも近代的な偏見にとらわれているのではあるまいか。模倣（コピー）は無価値だとはいわぬまでも、少なくともそこに私たちの考え方とは別の思考や論理の働きを見ないでいるのではないだろうか。ともあれ、ここで私は〝模倣の思考〟とでもいうべきものを考えようと思っている。

2

ところで、これは日本漢詩文があたかも日本文学ではないかのような扱われ方と関連しているが、古代文学の中で『懐風藻』という漢詩文集はミゼラブルな評価しか受けていない。乱暴な整理をすれば、万葉（歌）への貢献という点で評価されるか、日本漢詩文の嚆矢であったということかのいずれかにつきており、この詩文集自体をとりたてて評価することはほとんどなされていないと言ってよい。つまり総体として「国文学」、そして「日本文学史」は日本漢詩文をデラシネとして扱い、排除するように機能しており、そのことでいわばアイデンティティを確立しているようなおもむきさえあるが、その中でもっとも象徴的な扱いを受けているのが、この『懐風藻』ではあるまいか。つまりこの最古の漢詩文集には何よりオリジナリティが欠けており、それゆえ一段と価値も低いとされ、わずかに歌への貢献だけが、あるいは古いということだけがとり得だという塩梅なのだが、はたしてそういうものだろうか。いや、そもそもどんなオリジナリティを尺度とすれば適切なのだろうか。そして歌への貢献ということが、尺度としてふさわしいのであろうか。つまり『懐風藻』そのものの価値を排除してやまぬものは一体何であろうか。

万葉（歌）への貢献という評価のうちには小島氏が古典文学大系「解説」の中で、「香港に住む若い中国人」の言として、「歌（万葉集）はまだ仮名の現われない頃、漢字を借りて日本語を書いたからこそ、詩（懐風藻）よりも評価が高い」（傍点ママ）、といった考え方が抜き難く支配しているように思われる。文学と母国語、この点からいえばこうした考え方は至当であり、何よりも自然なものであるだろう。しかし、そうだろうか、というよりもこうした考え方こそ先にふれてきたように『古事記』を長らく支配してきた真淵・宣長以来の国学のイデオロギーではなかったろうか。『古事記』が『日本書紀』よりも卓越しているという考え方はまさしく「まだ仮名の現われない頃、漢字を借りて日本語を書いた」ことに負っていたからである。むろん『万葉集』などが、母国語――「漢字を借りて日本語を書いた」こと――で記述されていること、それ自体は貴重なことであるだろうし、とりたてて難くせをつけているわけではない。そうではなく、母国語での記述そのものに「評価」の重点を置いてしまうとき、ごく簡単に言って、あらかじめ答えは用意されてしまっており、いわば日本文学に従属する、デラシネとしての和製漢詩文という位置付け以上の意義は見いだしがたいからいうのである。

さらに日本漢詩文の嚆矢としての『懐風藻』という評価の軸についても、目下のところ「習作（ニチニード）」という以上のものはないといってよく、小島氏をはじめとして中西進らの比較研究の中で見いだされているのは六朝詩、初唐詩の影響、模倣ということにつきており、こ

こでもまたミゼラブルな評価がそのすべてである。つまり一つは母国語ではないという理由で、もう一つは中国詩文の影響と模倣であるという理由でこの漢詩文集は「国文学」・「日本文学史」からいわば排除されてしまうわけである。

この事態ははなはだ刺激的である。セルトーは「歴史は排除されたものの総体である」と言っているが、ごく簡単に言って「国文学」や「日本文学史」というものの性格を露わにしているからである。つまり「日本文学史」はまさしく「排除されたものの総体」として実現されているからである。こう考えると『懐風藻』のありとある不評こそは「国文学」及び「日本文学史」を総体として宙吊りにしかねないものだと言ってもよい。むろんここで私は「日本文学史」の中に『懐風藻』を正当に位置付けようとするものでもなければ、そのようなことに関心もない。ただ、『懐風藻』の不評に象徴される事態に関心があるだけである。

3

さて、これは藻中のどの詩をとりあげてもよいのだが、大津皇子のいわゆる辞世の詩がある。

五言。臨終。一絶。
金烏西舎に臨らひ、
鼓聲短命を催す。
泉路賓主無し、
比の夕家を離りて向かふ。（7）

（訓読は古典大系本小島氏に従う。）

この詩に対応する歌として『万葉集』に

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を
今日のみ見てや雲がくりなむ（四一六）

という後代の「辞世歌」とも見まごう挽歌がある。そして、この詩については大系本「補注」がいうように「類句」として、五代後周の江為の「臨刑詩」に「衙鼓侵レ人急、西傾日欲レ斜、黄泉無二旅店一、今夜宿二誰家一」があり、さらに明代には金聖嘆の「臨刑詩」に「御鼓了東急、西山日又斜、黄泉無二客舎一、今夜宿二誰家一」というものが見られる。つまり大津皇子の「臨終」もこれらとともに同祖のものから形成された後人の仮託（小島憲之「懐風藻の詩」『上代日本文学と中国文学』下）とも、鎌倉五山僧の創作書き入れ（中西進『万葉のことばと心』）とも考えられているわけである。

これら「臨刑詩」との「類句」性を考えるとき同祖モデルからの模倣性は推測に難くないし、影響もぬぐい去りがたいだろう。そしてこうした模倣性は他の詩についても同様であって、小島氏の「解説」の言を借りれば、相当にすぐれたものに見える紀末茂の五言「臨水観魚」（25）さえも張正児の「釣竿詩」の「模倣、わるくいえば一種の剽窃」といわざるを得ないものであるだろう。従って、小島氏がいわれるように、「このような上代人の態度」には、「まず語句の模倣が詩を作る第一歩でもあった」事情を考慮せざるを得ず、総体として「懐風藻に期待する点は、やはり最古の詩の総集として、上代人がどれだけ異質の詩的表現をしているかを、温情の眼をもって眺めることにある。」といわざるを得ないわけである。

しかし、まさしく「このような上代人の態度」のうちにこそ、つまり私たちから見れば「模倣、わるくいえば一種の剽窃」のうちにこそ、かれらの思考原理がものがたられているのではあるまいか。

要するに『万葉集』に見られる膨大な「類句」ということも含めて考えざるを得ないのは、はたしてかれらに「模倣」や「剽窃」という意識が、今日私たちが否定的にとらえるようにあったかどうか、ということである。

また、ここで小島氏は「語句の模倣が詩を作る第一歩」であったといっている。たしかにそうだとしても、こうした考え方は「異質の詩的表現」、つまりはオリジナリティに価値を置き、後代のものに発展を見たり、成熟を予定する考え方であって、基本的にはいわば「文学史」から見ているといってよいだろう。しかし、「文学」に予定があるのだろうか。つまり模倣から創造へ、私たちはあたかもこのような展開が必然であるかのように考えがちであって、そこに「文学史」を想定し、創造性、独自性にすべての比重を置きがちである。けれども、そう考えた途端、肝腎なところを見ないことになるのではあるまいか。ややパセティックな言い方をするなら、「詩を作る第一歩」に属した上代詩人の存在はどうするのかということ。つまりたんに「第一歩」にあって、「模倣」は「異質」(=オリジナリティ)に従属するものなのかということである。

いうまでもなく模倣と創造とは対になる概念である。同質性と異質性といいかえても同じことだが、概念レベルではいずれか一方というわけにはいかず、そうだとすれば少なくとも表現の上では同等なものであるだろう。つまりこの「第一歩」(模倣)を支えている思考方法こそ問題ではなかろうか。なぜならこれなしには創造もあり得ないからである。

ここで注意をひくのは、レ・ヴィ・ストロースのいう〝野性の思考〟あるいは「神話的思考」としての〝ブリコラージュ〟(「器用仕事」との訳があてられている。)と呼ぶ、「活動形態」である。

「……ブリコール bricoleur (器用人)とは、くろうととはちがって、ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作る人のことをいう。ところで、神話的思考の本性は、雑多な要素からなり、かつたくさんあるとはいってもやはり限度のある材料を用いて自分の考えを表現することである。何をする場合であっても、神話的思考はこの材料を使わなければならない。したがって神話的思考とは、いわば一種の知的な器用仕事(ブリコラージュ)である。」

さらにまた、

「器用人(ブリコルール)は多種多様の仕事をやることができる。しかしながらエンジニアとはちがって、仕事の一つがつについてその計画に即して考案され購入された材料や器具がなければ手が下せぬというようなことはない。彼の使う資材の世界は閉じている。そして『もちあわせ』、すなわちそのときそのとき限られた道具と材料の集合で何とかするというのがゲームの規則である。」(『野性の思考』)

と述べている。「神話的思考」としてレ・ヴィ・ストロースが注目しているのは「もちあわせ」、つまり既製の「限度のある材料」を用いて(引用であり模倣であるだろう)「自分の考えを表現すること」である。『懐風藻』の世界に見られる中国詩文の模倣性とはこのような「活動形態」(「神話的思考」)によっているのではあるまいか。要するに右のような思考は記紀の公認された「神話」の世界を形成する思考だけではなく、「上代人」の基本的な思考形態であり、たまたま漢詩文という形式をとったために私たちは必要以上に「態度」を問題にしているのではないかということである。

それに『懐風藻』には『日本書紀』に関わりをもった河島皇子、

大山上中臣連大島がおり、『万葉集』と重なる人物には長屋王や吉田宜らがいる。つまり修史事業から詩歌にまでかかわり得た「器用人」をかれらのうちに見い出すことはそう困難なことではないだろう。

ここで『日本書紀』が用いたいわば「資材の世界」に目を移してみるのもよいかもしれない。小島氏に従えば、「結局のところ、『漢書』『後漢書』『三国志』（蜀志を除く）『梁書』『隋書』『芸文類聚』『文選』『金光明最勝王経』が、書紀の編者の「直接」利用した主要な漢籍ということができ、在来の定説の如く必ずしも数多の漢籍を直接利用しているわけではなかった。即ち短語短句は、平生から暗記していたものを利用したのに過ぎなかったのである。」（日本古典文学大系『日本書紀』「解説」）ということであって、その「世界は閉じて」おり、「もちあわせ」、つまりは「そのときそのとき限られた道具と材料の集合」によってなされていたからである。

ともあれ、先の大津皇子の「臨終」詩は、祖「臨刑詩」のいわば一種のパロディであって、後人が「臨終」として大津皇子の心境を詠む時、そこに「臨刑詩」というコンテキストを破壊していることも見なければならないだろう。

近藤信義は先の挽歌における「辞世歌」性にふれて、「懐風藻の臨終詩が中国の風習の中にあるものの導入ならば、大津の詩はそうした知識に基づいた創作行為と見なければならない。そして大津挽歌も、臨刑詩の意識と等しい。万葉の挽歌は身近な人の死を哀惜するという表現の型をとるのが例であって、自らの死を悼むものはきわめて特異な存在」（「謀反――大津皇子を中心として」『万葉の虚構』所収）だと指摘しているが、もし、そうだとすれば、挽歌のコンテキストを破壊して歌において新たに「辞世歌」を生みだしているといってもよいだろう。

4

ヤウスは「あるテクストを解釈しながら受容するには、いつも美的知覚の経験のコンテクストがあらかじめ前提となる」ということを言っているが、漢詩文というテクストを受容し、その際にそのブリコラージュを成り立たせているものはどのようなものなのであろうか。ここで考えてみたいのは折口信夫が注目し、西田長男が『見立て』の民族論理」（『折口信夫を〈読む〉』所収）と呼んだ「見立て」というメタフォリカルな思考様式のことである。

いうまでもなく「見立て」は『古事記』のイザナギ、イザナミの二神聖婚の段に、「其の島（淤能碁呂島）に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき」として出てくるものであり（『日本書紀』においては、「化作」、「化堅」と記述されている。）折口信夫によれば、「現実に柱を建てたのではなく、あるものを柱と見立てゝ、祝福した」（「神道に現れた民族論理」）ということ、「みたてると言ふことは、柱にみなして立てる、と言ふ意」（「古代人の思考の基礎」）である。あるものを仮りに、何かに見立てるというこの思考様式は『懐風藻』にあっては次のようなものに示されている。

大伴王の五言。

駕に吉野宮に従ふ。應詔。
張騫が跡を尋ねまく欲り、
幸に逐ふ河源の風。
朝雲南北を指し、

夕霧西東を正す。
嶺峻しく絲響急く、
谿曠く竹鳴融る。
将に造化の趣を歌はむとして、
素を握りて不工を愧づ。(47)
山幽けくして仁趣遠く、
川浄けくして知懐深し。
神仙の迹を訪はまく欲り、
追従す吉野の潯。(48)

漢の張騫が黄河の河源をつきとめたという故事に自らの吉野従駕をなぞらえ、吉野川上流にさかのぼることを黄河の河源に至ったことに見立てるという論理がここにはある。吉野川は黄河であるという具合である。同様に紀朝臣男人にも、

七言。吉野川に遊ぶ。一首。
萬丈の崇巌削成して秀で、
千尋の素潯逆折して流る。
鐘池越潭の跡を訪はまく欲り、
留連す美稲が槎に逢ひし洲に。

というものがあり、「吉野川周辺を呉の鐘池や越の潭(川淵)」と見たてている。この詩の場合、大系本、注は「鐘池……—呉の鐘池や越の潭(川淵)の跡にも比すべき吉野川附近を訪れようと思って」と解釈し、「補注」において「鐘池」と「かねの池」であり地名であるという説など諸説を示しているが、「張騫が跡」(47)「神仙の迹」(48)などからすれば、「補注」にいういうように「吉野川を、呉のけわしい鐘山にある池や越の急流にたとえたもの」とすべきだろう。ただこの場合「比すべき」というような直喩的解釈が適わしいのであろうか。つまり、「張騫が跡」といい、「神仙の迹」といい、さらには「鐘池越潭の跡」とはいずれも吉野川及びその周辺を直接指示し、隠喩表現となっており、黄河なり、鐘池、越潭なりに見立てているからである。これらの詩がいずれも吉野従駕と関連し、さらに「柘枝伝説」とからんでいることも注目されるが、たんに隠喩ということではなしに、「見立て」の論理として万葉、古今にも見られる「見立て」の技法なども含めて、「美的知覚の経験のコンテクスト」として見るべきではなかろうか。

なおいえば、この「見立て」の論理はいわば述語的同一性にのっとっている。アリエッティは、「ノーマルな人間は主語の同一性にもとづいてのみ同一性を受け入れるのに反して、古論理的思考を行う精神分裂病者は、述語の同一性にもとづいて同一性を受け入れる」と言っているが、そうだとするとこの「見立て」に見られる推論の形式は「精神分裂病者」のものだと言ってよいかもしれない。もっとも、私たちの日常生活においても、衣類などの見立てのよしあしから、水石までこの論理が活動しているところを考えるとそうそう「古論理」、「精神分裂病」というわけにはいかないだろう。ただ、『懐風藻』に見られる模倣の論理を考えるとき、たんに隠喩と見るだけでは充分ではあるまい。ともあれ、かれらの思考がどんなに異質なものであるかは改めて考えざるを得ないだろう。

5

すでに見てきたように『懐風藻』には二つのフィルターがかけられている。一つは日本語ではないこと、もう一つは和製漢詩文とし

ての独自性に欠けること、つまり国籍も所属もはなはだ曖昧であるというわけである。むろんこの二つとは実は同じ視点によっている。いずれもオリジナリティが絶対的な基準であるからである。とどのつまりは、「文学史」を設定しないかぎり、「習作」としてさえも位置をもてないし、「文学」においてはその模倣性はどこまでも災いしてやまない。そして、もしその模倣性が「見立て」（＝述語的同一性）によっているとするなら、「精神分裂病」ということになってしまうだろう。要するにこの書物はどこからも救いがないわけである。だが、このことこそ「国文学」（母国語）と「日本文学史」の制度性を明示していることだろう。

私たちは通例オリジナルかコピーかという文脈で後者を否定的に扱いやすい。しかし、コピー（漢語・漢詩文）がオリジナル（和語、和歌、和文）よりも有効性をおびていた事例に事欠かない[注3]し、宮川淳がいうように、コピーは決して「従来の既知の機能の肩代り」ではなく、「未知の機能、まさしく引用というそれを出現させた」（『引用の織物』）ということにあるとすれば、ことはそう簡単なことではないだろう。いいかえれば、『懐風藻』の場合、「素を握りて不工を愧づ」（47）ということ、しばしば「文藻は我が難みする所」（58）であるにもかかわらず、筆をとり書いたというところにあるだろう。ごく簡単に言って、『懐風藻』の模倣とは引用すること、つまり「素」（筆）を「托」ることにあり、「文学」において歌い、語ることのほかに決定的に重要な「未知の機能」として自覚的に書くことを実現したところにある。そして、なおいえば、『懐風藻』はテキストの生成・成長の問題としても示唆するところの多い書物である。編者とも目されたことのある「番外」の「亡名氏」の詩が、五山僧であった可能性があるばかりではなく、中西氏がいうように大津詩もその可能性をもつからである。もとより、これはコピーとオリジナルの問題であって、コピーか、オリジナルかのそれではない。

注1　拙稿「古事記をめぐる論争史――方法としての偽書説――」（『中央公論歴史と人物』一九七九・四）

2　拙稿「真淵の論争――文字の抑圧」（『国文学解釈と鑑賞』一九八〇・四）、「書物の解体など」（『折口博士記念古代研究所紀要』第四集、一九八四・十一）

3　鷗外や漱石ら文人たちもそうだが、川口久雄が『平安朝の漢文学』で指摘しているように海彼の国に渡った「幕末・明治の青春」にとって和歌、俳句、和文よりも「漢詩文」の方が、しばしば母国語以上の役割をはたしていた事実がある。